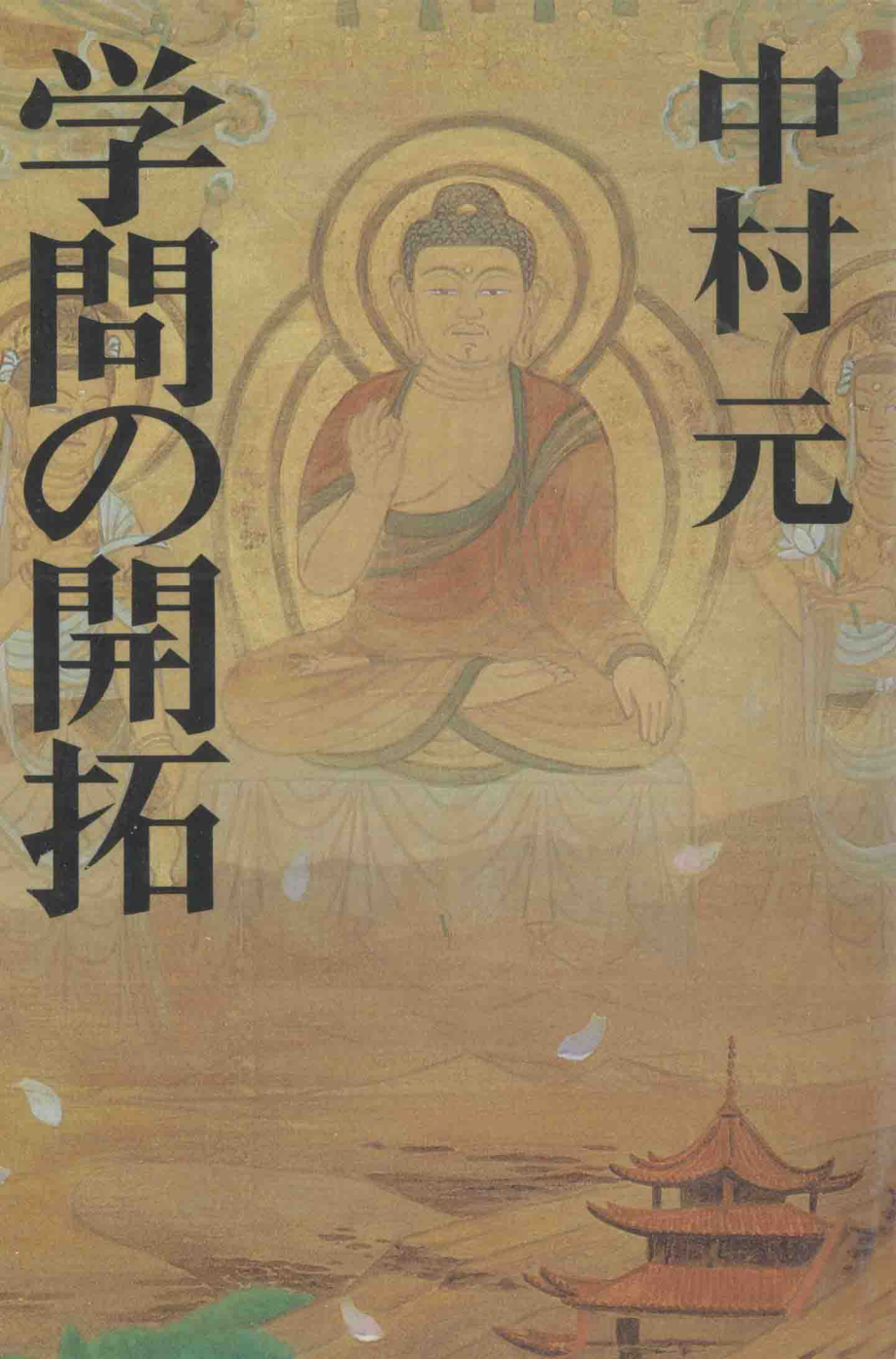


中村元

学問の開拓



学問の 開拓 中村元



莫高窟
隋

61.9.12.

学問の開拓

昭和六十一年十二月五日

初版第一刷発行

定価 一、三〇〇円

著者 中村 元

発行者 古川忠司

発行所 株式会社佼成出版社

〒一六六 東京都杉並区和田二一七一

電話(〇三)三八三三二五一(代) 振替東京七七六一

印刷所 日本写真印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません

© Hajime Nakamura Printed in Japan 1986

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作権および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

ISBN 4-333-01159-0 C0014

学問の開拓

目次

はしがき——— 1

第一部 独創への道——— 7

思想とのふれあい。

日本の学問的風土／勉め強いこと／風土と学問／明治人の気質／父母のこと／読書の日々／歴史を見る目

学問の独創性 50

真の友人とは／学問の師について／仏教との出会い

インド哲学への道 71

「若さ」という驕り／宇井伯寿先生のこと／自分が納得できる研究／語学について／人生の順縁と逆縁／書き残すことの意味

第二部 学問の使命 ———— 三

インドのころ 二二

水い廻り道／思想と歴史／現地踏査の必要性／原始仏教の研究／平易に書くということ／時間との闘い

学問とその使命 一四

比較という手法／「比較思想」とは何か／平和への道／比較思想の展望／特殊化と普遍化

終わりになき開拓 一七

人間の回復、学問の回復／新たな開拓へ／小宇宙即大宇宙

中村元著作論文目録 ———— 一九

第一部 邦文による著作 二〇

第二部 外国語による著作 二五

はしがき

学問的な意味でのわたくしの自伝を書いてほしい、との依頼があつたとき、わたくしは即座に辞退した。わたくしの生涯には、特別に人に伝えるほどのものがあるわけでもないし、またそういうことをする暇で、わたくしは未熟な自分自身の研究を進めねばならないと考えているからである。ところが、編集部の人々はあきらめなかつた。「ともかく編集部の方ではこれだけの企画を立てたから見えてほしい」といって、わたくしの今までの仕事を微に入り細を穿^{うが}つて綿密に調べ上げた企画プロットを送つて寄せられた。その熱意と努力とに打たれた。これだけ大変な労力と時間を傾けられたのだから、それを無にするのは悪いと思うようになった。そこで、自分では書く時間的余裕がないが、インタビュアーに基づいて一書をまとめられることで、ついに承諾した。

ところで、そのインタビュアーが大変大がかりなことになった。編集長の三原嘉幸氏をはじめとして、斉藤佳子氏、飯島靖雅氏、渡辺誠氏、カメラマンの菊池東太氏がわたくしに同行して、松江まで行かれた。話を聞くには、故郷のような所で寛^{くわん}いで話を聞き出した方が、本人の本音が出てくるのである。家内もその両親が松江の出身であるというので、引つ張り出された。遠い昔を思い出しながらの口述は、またひとしお感懐の深いものがあつた。

ついに、話の録音に基づいて、編集部の方で整理執筆されたのがこの書である。主として文章をまとめられたのは、渡辺誠氏である。したがってこの書は、わたくしが自ら執筆したものでなくて、編集部が読者諸氏の興味や意向を忖度して、聞き出して作られたものである。ただし実質的内容はわたくし個人に責任があることは言うまでもない。インタビュ어의ままで、文章が散漫になる恐れがあるが、編集部の方できちんとした文章に整えられたので、全体としてはましまりのあるものになったと思う。ある部分は、わたくしが先年書いた論文や著作物から引用されている。写真は、編集部の意向にしたがってカメラマンが撮影されたものと、わたくしの家に保存されていた古い写真の中から、編集部が選ばれたものである。プライベートな写真を書物に掲載してよいかどうか迷ったが、どなたかが記念のために撮影して残されたものであるから、その好意を生かすために、おとなしく編集部の意向にしたがった。

著作論文目録は、大部な量となったが、これからの学徒に利用して頂ければ幸せだと思つて、あえてつけてもらった。ただリストだけでは、一般読者はウンザリされると思われるので、編集部と合議の上、適当な個所に説明の文章をすこし挿入することになった。

こういう大変な手数を経てでき上がった書物であるが、これからの若い人々に何らかのお役に立てば幸せである。そして大変な努力を惜しまれなかつた方々に深く感謝する。

一九八六年十月二十四日

中村 元

学問の開拓

目次

はしがき——— 1

第一部 独創への道——— 7

思想とのふれあい。

日本の学問的風土／勉め強いこと／風土と学問／明治人の気質／父母のこと／読書の日々／歴史を見る目
学問の独創性 80

真の友人とは／学問の師について／仏教との出会い

インド哲学への道 11

「若さ」という驕り／宇井伯寿先生のこと／自分が納得できる研究／語学について／人生の順縁と逆縁／
書き残すことの意味

第二部 学問の使命 —— 三

インドのころ 二三

水い廻り道／思想と歴史／現地踏査の必要性／原始仏教の研究／平易に書くということ／時間との闘い

学問とその使命 一四〇

比較という手法／「比較思想」とは何か／平和への道／比較思想の展望／特殊化と普遍化

終わりになき開拓 一七五

人間の回復、学問の回復／新たな開拓へ／小宇宙即大宇宙

中村元著作論文目録 —— 一九七

第一部 邦文による著作 二〇二

第二部 外国語による著作 二五七

装画 入江正巳

写真撮影 菊池東太

アートディレクション 加藤精一

本文中の（ ）内の註は編集部が記しました。

第一部

独創への道

思想とのふれあい

「古いものを喜んではならない。また新しいものに、魅惑されてはならない。滅びゆくものを、悲しんではならない。牽引する者(妄執)に、とらわれていてはならない」『スッタニパータ』より

日本の学問的風土

この本の中で、「中村の学問人生論を語ってほしい」というのが、編集部 の要望である。現在のわたくしは、十三年前に東京大学の教職を退き、「東方学院」という小さな研究所を主宰している在野の老学徒である。そんなわたくしに、自分の生い立ちや両親のこと、少年期、青年期のことなどを語りながら、わたくし自身の学問観を語ってほしいというのである。

在野に身を置くとはいえず、私はまだまだ自分を回顧するほどのゆとりもなく、いささか気の重い問いかけだと思っていた。

しかしながら、わたくしは語ることにした。わたくしのささやかな学問的軌跡が、若い人々の

学問人生にいきさかなりとも役立つことがあれば、恥ずかしながら語ったことも意味がでてこようと思うからだ。だから、これまでのわたくしの著作物とは異なつた内容であることを、まず最初にことわつておかなければならない。

ところで、学者としてのわたくしの人生は、長いといえれば長いし、また短いといえれば、やはり短いといえるような気がする。ただ、わたくしは、長いような短いようなその学問人生を、良き師に導かれ、良き友に支えられて生きてくることのできた幸せ者だと、自分の来し方を振り返つて、感謝の念を新たにさせられるのである。

日本の学問的区分によれば、わたくしの専門は、インド哲学ということになっている。そこでは「インド哲学者」と呼ばれることもあるが、これは日本独特の名称で外国にはない。元来、日本語では、フィロソフィー (philosophy) を「哲学」と訳しているが、日本語で使われている哲学と、西洋人が意味する、あるいは一般に用いている場合のフィロソフィーは、必ずしも一致しない。日本で哲学というと、非常に難解で、煩瑣はんさな議論をする学問と思われ、案外、人生の問題というものは無視されてしまう傾向がある。ところが、西洋でフィロソフィーというときには、人生観・世界観まで含めて考えられているのである。

考えてみると、フィロソフィーという言葉がギリシアで最初に使われたときには、実践的認識のことであつた。これを哲学と訳しても、その「学」が「学ぶ」という意味であれば、明らかに実践的認識の意味になるのであるが、この頃は、非常に特殊な議論をするのが哲学だと思われて

いる。

あまつさえ「インド哲学」というと、まるで火星人の言語のような難解な術語をそのまま用いる学問と、世間では考えられているので、わたくしは自分の専攻を「インド思想史」と称している。思想を、動いている生きた社会に即して捉えるためには、このほうがよいと思う。

ところで、人間は人間である限り、思想なしに生きていくことはできない。思想など無用の長物だ、と退ける人もいるだろうが、そのように主張すること自体が、じつは一つの思想を形成しているのである。人が生きていくには、自分の行動様式を統一し、その準拠する思想的根拠がなければならぬ。

では、「思想」とは、何であろうか。ある辞書には「判断以前の単なる直観の立場に止まらず、このような直観内容に論理的反省を加えてでき上がった思惟の結果。社会・人生に対する全体的な思考の体系」と定義されている。これでは何のことかよくわからない。「思想」として、わたくしが言いたいのは、人の考えであって、それが各個人の行動を全体として指導する意義をもっているもの、人が生きていくための指針をいうことにする。

ところが、この思想に関する学問が、日本の諸大学で細かく分けられているのは、いったいどうしたことであろう。例えば、ある国立大学の講座名をみると、西洋哲学、中国哲学、インド哲学、倫理学、宗教学、宗教史学、心理学、美学、芸術学など、さながら蜂の巣のように細分化されているのである。これらの学科それぞれにはある種の「縄張り」があつて、例えば、倫理学の